

家庭洗濯に関する研究（第17報）

－「着たら洗う」時代の家庭洗濯について－

○ 尾杉 孝夫、塩原 正隆、増田 光輝（ライオン㈱）

＜目的＞ 近年、家庭洗濯においては、清潔志向の高まりから洗濯行動が「汚れたら洗う」から「着たら洗う」へと変化し、日常の汚れは軽くなったと考えられている。一方、洗濯機は全自動式が主流となり、大型化・低浴比化が進むと共に様々な機能を訴求した製品が上市されている。そこでこれら洗濯環境の変化が、日常の家庭洗濯に及ぼす影響を汚れの蓄積性、布傷みの観点から把握する。

＜方法＞ 代表的な2機種（98年製）の全自動洗濯機を用い、繰り返し洗濯を行った場合の汚れの蓄積性、布傷みを評価した。汚れの蓄積性はワイシャツの衿汚れ、肌シャツの黄ばみをバンドルテスト（男性パネル11名）により評価した。蓄積性は衿汚れスケール（1～5点）を用いて点数付けし、黄ばみは Δb 値を測定した。布傷みはタオル、ポロシャツ、プリントTシャツを用い、種々の変化を官能テストにより評価した。また、上記洗濯機を各々10家庭で1年間実使用テストを行ない、意見を聴取した。

＜結果＞ バンドルテストの結果、衿汚れでは2機種とも汚れの蓄積が認められ、10回繰り返して3.75点～4.5点であった。肌シャツも徐々に黄ばみが増し、15回繰り返して、 Δb 値が1.4～2.4であり、目視で確認できるレベルであった。布傷みについては、型崩れや風合いといった点で変化が認められた。また実使用テストの結果、消費者は汚れの蓄積を衿・袖口の汚れ、肌シャツの黄ばみといった点で、布傷みを肌シャツ等の伸びやストッキングの肌触り等の点で感じていることが確認できた。以上より「着たら洗う」行動が定着した現在でも、汚れの蓄積が認められること、布傷み軽減に対するニーズがあることが確認出来た。今後は汚れの蓄積を抑え、布傷みの少ない洗濯ソフトの構築が必要である。